

令和7年度 第3回 FD・SD 研修会報告

日時：令和7年 7月22日（火）15:00-15:40

場所：H207

出席者：23名

発表者：新井 浩（IR室）

テーマ：生成AIの使い方を考えるー活用事例と学生アンケートからー

近年、ChatGPTをはじめとする生成AIが急速に普及し、日常的に業務へ取り入れている教職員も見られる一方で、使用経験のない教職員や、学園全体としての活用状況が十分に把握されていないといった声も多く聞かれる状況にある。そこで今回は、教職員および学生を対象にアンケートを実施し、生成AIの使用状況や活用目的、不安や懸念といった実態を把握したうえで、今後の業務や授業への取り入れ方、学生への指導・啓発のあり方を考える契機とすることを目的に本FDを企画・実施した。

1. 生成AIの基礎理解とツール比較

導入として、生成AIの基本的な仕組みと特性について確認した。ChatGPTなどのツールは、膨大な言語データをもとに「次に来る言葉」を予測して生成するモデルであり、意味を理解しているわけではない。そのため、生成される内容には事実誤認や論理の飛躍を含む可能性があることを前提とし、慎重な取り扱いが必要である。また、ChatGPTとGeminiを比較したサイトを例に、それぞれの出力傾向、表現の柔らかさ、翻訳精度や画像対応、プラグイン連携など、特徴の違いを紹介した。

2. 学生・教職員の利用実態と意識の差

今回のFDのために短大教職員と短大生全員を対象にアンケート調査を実施した。その結果、学生の約75%が生成AIの使用経験があり、そのうち約3割は「日常的に使っている」と回答した。教員・職員を含む教職員全体でも半数以上が何らかの形で使用しているが、日常的な利用は3割程度にとどまった。特に事務職員では、日常的な活用は1割程度と少なく、現状では活用が限定的であることがわかった。

また、利用目的にも立場による差が見られた。教職員が文書作成や議事録の整形、アイデア出しなど業務支援に活用しているのに対し、学生は課題やレポートの補助に加えて、悩み相談や調べもの、さらには娯楽的な用途まで幅広く使っている傾向が明らかとなった。生成AIを日常の中で自然に取り入れている点は、学生特有の活用スタイルである。

一方で、学生・教職員ともに共通して「情報の正確性への不安」「著作権や倫理的問題」などに懸念を抱いており、「便利だが、全面的には信頼できない」とする慎重な姿勢が多数を占めた。

3. 活用事例：たたき台・整形・壁打ちとしてのAI

スライドでは、教職員による実際の活用事例を紹介した。たとえば、会議メモを入力することで自然な報告文に整形したり、申請書類や研究構想のたたき台を生成AIと一緒に練っ

たりするなど、業務補助ツールとしての活用が挙げられた。中でも「文章を書き始めることが苦手でも、AIに話しかけることで思考が動き出す」といった声もあり、発想支援や壁打ち的な存在として役立っていることが示された。文体調整や構成補助など、柔軟に対応できる点が生成AIの大きな特長である。

4. 懸念点：指導・リスク・ガイドラインの不在

生成AIの普及が進む一方で、教育現場における運用ルールやガイドラインの整備はまだ進んでいない。学生の55%が「授業でAIの使い方について指導を受けたことがない」と回答しており、教員の半数も「特に言及していない」としていた。使用を許可する・禁止する・推奨するなど、授業ごとの方針が曖昧なままになっているケースが多い。

また、情報の誤り、著作権、倫理、情報漏洩、学習姿勢への影響、成果物の評価の難しさといったリスクも整理された。特に、外部クラウド型のAIツールを用いる場合、入力内容がサービス提供側に保持される可能性がある点から、「外部に出しても差し支えない情報のみを入力する」という原則が必要である。

こうした背景を踏まえ、今後は学内での生成AI使用に関して、前提・リスク・使用条件に関する共通認識を形成し、最低限のルールを整備していく必要がある。各教員の裁量に委ねる部分を残しつつも、学生にとって安心して使える環境を整えるために、学園全体としての方針づくりやリテラシー教育の検討が求められる。

5. まとめ

今回のFDを通じて、生成AIが特別な技術ではなく、文書作成や発想支援、情報検索、相談補助といった日常的な活動に役立つツールとして浸透しつつある現状を示した。今後、業務や教育のさまざまな場面でその有用性はますます高まると予想される。一方で、AIの出力をそのまま鵜呑みにせず、人間が責任を持って内容を確認・修正する姿勢が不可欠である。生成AIは、適切に使えば教育・業務の強力な支援ツールとなる。一方で、その特性を理解せずに使えば、誤情報や学習姿勢の劣化などのリスクもはらむ。今回のFDが、学内での議論を深めより良い指導・運用体制づくりの第一歩となることを期待する。

